

## 『桜の下で待っている』(2018年)

彩瀬 まる／著 実業之日本社

ふるさとをテーマに書かれた短編集です。

最初の話では、大学生の智也が栃木にいる祖母に会いに行きます。祖母は7年前に親族の反対を押し切り男性と同棲を始めました。親族に溝をつくった恋でしたが、5年前に男性は亡くなります。「わがまを貫いたはじめ」と今も一人暮らしを続ける祖母に、智也は何を思うのでしょうか？

その他それぞれの主人公にも様々なふるさとへの想いが存在します。ふるさととは家族とは何か、温かく見つめ直すことのできる1冊です。



## 『マジヨモリ』(2003年)

梨木 香歩／作 早川 司寿乃／絵 理論社

ある朝つばきが目を覚ますと、机の上に手紙が置いてありました。

「まじよもりへ ごしょうたい」

窓をたたいた空色の蔓をたどって、つばきは森の奥へと進みます。進んだ先には全身が白っぽくて、髪の毛の一筋だけが長く空色をした女の人がいました。女の人は、つばきの他にもう一人女の子を招待して、お茶会を開いてくれました。

春の日に起こった、優しくてあたたかい、すてきな出会いのおはなしです。



## 『春、戻る』(2014年)

瀬尾 まいこ／著 集英社

望月さくらは三十六歳。六月に結婚を控えている身だ。料理教室へ通ったり、嫁ぎ先になる和菓子屋の店番を手伝う毎日を過ごしている。そんなある日、明らかに年下で見覚えのない男の子が兄だといって現れた。さくらを心配し、頼んでもいないのに世話を焼き始める。はじめは不審に思っていたさくらだが、あまりにも親身になってくれる「おにいさん」にだんだん打ち解けていく。



## 『春の日(里山の一日)』(2008年)

今森 光彦／著 アリス館

春は新しい命が誕生する季節です。冬の寒さに耐えてつばみがふくらみはじめます。落ち葉の下で眠っていた虫たちは目を覚ましだします。この本では、春の輝かしい季節がきれいな写真とともに紹介されています。最近あまり見かけなくなったカンサイタンポポやカタクリなども出てきます。

著者の今森氏は琵琶湖をのぞむ田園風景のなかにアトリエをかまえ、生物などのあらゆる自然を写真におさめ、取材されています。今回の写真もアトリエのある琵琶湖周辺の里山で撮影されたものです。



## 『檸檬』(2011年)

梶井 基次郎／著 角川春樹事務所

桜の樹の下には屍体が埋まっている！桜があんなにも美しいのはその下に屍体を埋め、それらを養分にしているのだ。そう考える俺は、ここ数日あまりにも桜が美しいので不安になっていたがようやく納得できた。きっと根はおぞましい触手がうねうねと動き養分を吸い上げているに違いない。

さまざまな作品の元ネタになっている『桜の樹の下には』など有名な短編5篇を収録した1冊です。



## 『走る？』(2017年)

東山 彰良／(他)著 文藝春秋

第一話「パン買ってこい」。

僕は、ある日不良の入間君に、使いつ走りパンを買って来いと命令される。そして、その日から毎日、パンを買いに行かされることに。毎日毎日、パンを買いに行っている内に、喜んでもらえるパンを買うことにこだわり出した僕。本人から聞き出した好みのパンは、焼きたてパン。焼きたてパンを、昼休みの間に入間君に提供するにはどうすればいいのか？

13人の作家の、「走る」がテーマの短編集。「走る」×「春」の短編を探してみてください。

